

日本の古典文学16

日本古典劇

小山 弘志・鶴見 誠



さ・え・ら 書房

日本の古典文学16

日本古典劇

小山 弘志・鶴見 誠



書房

著者略歴

小山弘志 1921年生まれ。東京大学文学部国文学科卒。
現在東京大学教授。中世文学専攻。編著「謡曲・狂言・
花伝書」。

鶴見 誠 1904年生まれ。東京大学文学部国文学科卒。
現在茨城キリスト教短期大学教授。近世国文学専攻。
著書「竹田出雲集」他。

日本の古典文学16

日本古典劇

昭和50年5月 第1刷発行

昭和60年4月 第3刷発行

著者 こやまひろし 小山弘志
つるみまこと 鶴見 誠

発行者 浦城光郷

印刷 須藤印刷

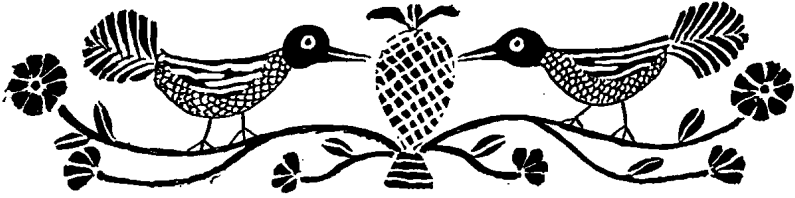
製本 協栄製本

発行所 さ・え・ら書房

東京都新宿区市谷砂土原町3丁目1
振替東京4-87244 電話03(268)4261

©1975 Hiroshi Koyama
Makoto Turumi

NDC 918
ISBN4-378-01616-8



もくじ

能のうと狂言きょうげん

はじめに……………六

能と狂言——六 能・狂言の役者——八 能・狂言の舞台——二四

[能]

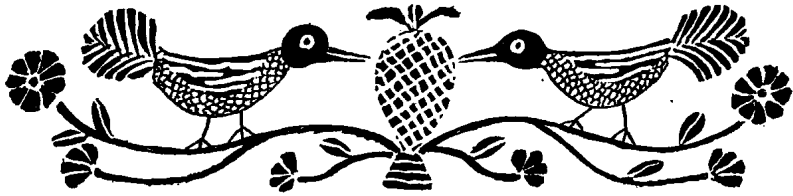
一 熊ゆ野や……………六

1 ワキ宗盛むねもりの登場……………二〇

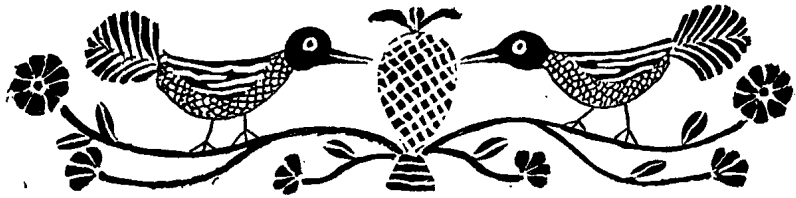
2 シテツレ朝顔あさごの登場……………三三

3 シテ熊野くまのの登場……………三五

4 母親の手紙……………元



▽	能の持っているもの——祝言……………	三〇
▽	夢幻能のいろいろ——能の種類・面……………	二五
▽	世阿弥元清……………	二三
四	頼政……………	二五
▽	現在能と夢幻能……………	二九
▽	観世十郎元雅……………	二九
三	隅田川……………	二七
▽	観阿弥清次——能の創始者……………	二七
二	自然居士……………	二六
▽	能の特徴……………	二五
8	帰郷——キリ(終曲)……………	二五
7	シテ熊野の舞……………	二〇
6	清水寺への道中——作り物「車」……………	二〇
5	地謡……………	三



五 猩しやう 々じやう 二四

〔狂言〕

▽ 狂言について 二六

一 成り上がり 二三

▽ 狂言の台本 二七

▽ 太郎冠者たろうかむさし 二四〇

二 ふたり袴ふたかま 二四二

▽ 狂言の笑い 二四四

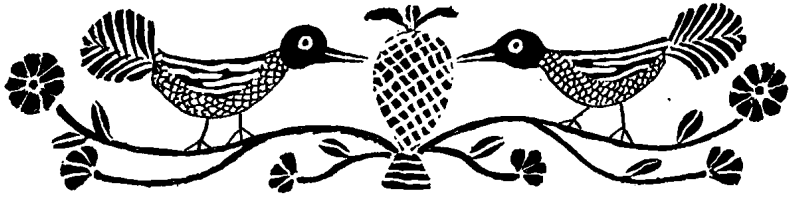
三 朝比奈あさひいな 二五

▽ 狂言の楽しさ 二五

四 子盗人こぬすびと 二六

▽ 狂言の持っているもの 二七

おわりに 二九



歌舞伎と人形浄瑠璃

はじめに——歌舞伎と人形浄瑠璃の歴史……………一八

国姓爺合戦……………二〇

菅原伝授手習鑑……………二一

仮名手本忠臣蔵……………二二

近江源氏先陣館（盛綱陣屋の場）……………二五

伽羅先代萩（飯焚きの場）……………二七

東海道四谷怪談……………二八

沓手鳥孤城落月……………二九

修禪寺物語……………三〇

そうてい 新井五郎

能と狂言

小山弘志

はじめに

1 能と狂言

みなさんは、能とか狂言とかいうことばをお聞きになったことがないでしょうか。ないかも
しれませんね。でも、謡とか謡曲うたい ようきょくということばはお聞きになったことがあるでしょう。もしか
すると、おじいさまかおとうさまがなさっているかもしれないですね。また「末広がり」のお話
——あの、太郎冠者かじやがだまされて、扇あふぎのかわりに古いからかきを買って来てしまうというお話
は、どこかで聞いたか読んだかなさったのではありませんか。謡は、能とたいへん関係の濃こい
ものです。また「末広がり」は、狂言の代表と言ってもよいくらい有名な曲です。これから私
は、その能と狂言とのお話をしてみようと思います。

能と狂言とは今から六百年ほど前、室町時代のはじめごろにできた演劇です。こんなに古く
できたものですが、ずっと演じつづけられて、日本の誇る古典劇として現在も上演されていま
す。能や狂言よりもあと、江戸時代には歌舞伎や浄瑠璃じやうるりができ、これも古典劇として行なわれ
ています。

このように現在日本には、いろいろな古典劇があります。そしてこれらが、能、狂言、歌舞伎というように、それぞれ特別の名前で呼ばれていることに注意してください。もちろんこれらは、広い意味では劇という共通性を持っています。だが、特別な名前を持っていることが示すように、それぞれが別々の特殊な形のものなのです。したがってこれらの古典劇は、特別な修行を積んだそれぞれの専門家によって上演されるのであって、だれにでもかんとんにできるものではありません。

能・狂言はできた時代が古いところから、ふつうの劇とだいぶ異なった点を持っています。当然のことながら次の時代にできた歌舞伎にいろいろな影響をおよぼしました。また六百年もの長い間生き通して来たのですから、その間に多少のうつりかわりもありました。いろいろなお話したいことがあるのですが、私は、能や狂言がどんなものであるか、それはどんな点ですぐれたものなのかということに主眼をおいて、なるべくやさしくお話してみたいと思います。

説明の順序として、はじめに能・狂言の役者やその演ぜられる舞台について説明し、次に能のお話、そして狂言のお話をしてゆきます。

なお、本書に入れた能・狂言の舞台写真は、すべて吉越立雄さんの撮影されたものです。演者のお名前をあげませんでした。みなすぐれた方々です。また松野秀世さんに「自然居士」のさし絵を書いていただきました。これらの方々にあつくお礼を申しあげます。

2 能・狂言の役者

能はふつうの劇とちがって、謡い物によって筋を展開してゆきます。役者の動作は、その謡に合せて舞うような形をとります。そして、必ず笛や鼓などの囃子を伴ない、囃子にはやされて舞を舞う部分がないような場面になっています。つまり能は、歌と舞とを主眼にしている、一種の歌劇であり、また舞踊劇なのです。

このような能では、ふつうの意味の役者のほかに、扮装をしないで舞台上に登場し、囃子その他の役をする人々も必要です。そして劇中の人物として行動する役も、それを補う役も、それぞれ役わりが決められて分業の形となっています。次に例をあげてかんたんに説明しておきましょう。

(1) シテ 一曲の能の主演のことです。「し」は「する」という意味、「て」は「捕り手」「書き手」の「て」で、シテとはする人の意味です。

たとえば、「頼政」の源三位頼政とか、「鉢木」の佐野源左衛門常世とか、「安宅」の武蔵坊弁慶とかのように、一曲の中心となる役がシテです。能は前後二つの場にわかれているものも多いのですが、そのようなときには、シテは一度舞台から退いて、扮装を変えてから再び登場

はじめに

します。こんな場合、前者を前シテ、後者を後シテと名づけれます。前シテ後シテは同一人物であることがふつうですが、「藤戸」のように、前シテが母、後シテがその子の亡霊というように、別人になることもまれにはあります。

(2) ワキ シテ(主役)に対して、シテをたすけて一曲をすすめてゆく役をワキといいま
す。たとえば、「頼政」の無名の旅僧、「鉢木」の最明寺入道北条時頼、「安宅」の富樫はワキ
です。シテは多くの場合、面をうめますが、ワキは面をつけることはありません。

(3) アイ これは狂言師の演ずる役です。狂言師は、後にのべるように、狂言を演ずる役
者ですが、能でも一役を演じているのです。前後二つの場のある能において、シテ(主役)が扮
装を変えるのに時間がかかります。この間を、ワキの問いに答えて物語りをしてふさぐような
役が多いので、この役を間と名づけるようになりました。もつとも、前後の場をつなぐばかり
ではなく、劇として相当重要な役を演ずる場合もあります。「自然居士」のアイや、「安宅」の
アイ(能力・太刀持)はその例です。

以上三つの役は扮装して劇中人物として行動する、ふつうの意味の役者です。これらの役者
はそれぞれもっぱらその役だけを演じ、他の役を兼ねることはありません。シテ方の役者がワ
キやアイの役を演ずることはないのです。なお曲によってはツレと呼ばれる助演者が登場しま
すが、これもシテツレ・ワキツレに分かれ、それぞれシテ方・ワキ方の役者によって演ぜられ

ます。また、**子方**（こかた）といってこどもの演ずる役もあります。これはシテ方に属します。

このように劇中人物が三つの役に大きく分けられ、それぞれが別々のもので他の役を兼ねることはないというのは、ふつうの劇の場合とたいへんちがったことです。のちに次第にはつきり分けられて来たという事情もありますが、能のできたときからこのような区別のだいたいはできていました。それは、この三つの役がそれぞれ果たす役わりがちがいが、したがって修行もちがっていたためです。

シテ（主役）の役の特徴は舞を舞うということです。そしてシテは主役ですから大事な場面の謡（うたい）を謡い、あくまでも中心の人物として行動します。これに対してワキは舞を舞いませぬ。謡も少しは謡いますが、多くは一曲のはじめの部分だけで、いわばシテをみちびき出すような役をします。シテが出て来て来てしまうと、ワキの役目はほぼ終わったことになり、舞台にすわったままではほとんど動作をしないというような能が多いのです。アイがシテ・ワキともっともちがうのは、謡（うた）よりもせりふを主（しゅ）とすることです。そしてそのことばも、シテやワキのことばが「候体」（もちろつたい）であるのに対して、当時の口語である「ござる体」（たい）を用いるのがふつうです。このように三つの役はそれぞれちがっていますので、**武蔵坊弁慶**（むさしほうべんけい）という同じ人物が、「**安宅**」（あたか）ではシテ、「**舟弁慶**」（ふなべんけい）ではワキというようにちがうこともおこります。「**安宅**」の**武蔵坊弁慶**は舞を舞うように作られているので、シテの役でなければならず、「**舟弁慶**」では**静御前**（しずかごぜん）が舞を舞



囃子方 (向かって右から笛・小鼓・大鼓・太鼓)

うように作られているので、彼女をシテとして弁慶はワキの役になっているのです。

次に、紋付の着物に袴をつけて登場する役を申しませう。これらの役はふつうの劇では表に出ないはずのものです。能では一曲の間、始めから終わりまで舞台上にいます。

(4) 地謡 これは八人ぐらいの集団で、

舞台の向かって右側に二列に並んですわり、一曲の中の定められた部分を合唱する人たちです。能が地謡を持つてゐることはふつうの演劇とたいへんちがっていることで、これについてはまた後に説明することにします。なお、この地謡はシテ方の者が担当します。

(5) 囃子 笛・小鼓・大鼓・太鼓の四役があります。それぞれひとりずつです。曲によつては太鼓のいらぬものもありますが、

他の三つの噺子は必ずどの曲にも登場します。この四つの役もたがい独立したもので、他の役を兼ねることはありません。

(6) 後見

文字通り後で見ている人です。

舞台後方にすわっており、シテ(主役)が舞台上で

扮装を変えるとき手伝ったり、装束の乱れを直してやったり、必要な道具の出し入れをしたりします。これはなかなか大事な役で、万一シテが途中で急病になったりしたとき、そのままシテに代わってその役をつとめる義務があります。ですからシテと同等またはそれ以上の力量を持った者がなることになっています。この後見はシテ方の者の役です。

一曲の能を上演するときには、以上の六つの役の人々の協力が必要です。おのおのが自分の持ち場を十分に果たし、それが総合されて能が演ぜられるのです。その際、シテがあくまで中心で、他の役はシテをたすけ、シテは各役の演技を統率しながら自分の芸を示すのです。

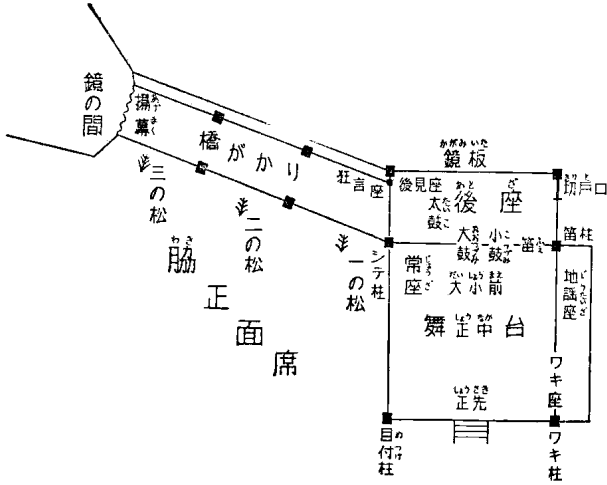
ここで能の役の系統の整理をしておきましょう。まずシテ方。これはシテやシテツレ、子方、地謡、後見を演ずる系統です。次にワキ方。これはワキやワキツレを出す系統です。第三に狂言方。これは狂言を演ずるとともに能においてアイの役を演ずるものです。第四に噺子方。これは前にのべたように四役あり、それぞれが独立しています。以上の四系統です。シテに対して他の三つ——ワキ・狂言・噺子を三役といっています。

では次に、狂言の方の説明をしましょう。これは能の場合よりずっとかんたんです。狂言は原則として囃子方も地謡も用いませぬ。もつばら登場人物だけで劇を展開するので。能のよりに舞や謡をもつて一曲をつらぬくのではなく、せりふとしぐさで進めてゆくものです。したがって、ふつうの劇に近いのですが、ただ能といっしょに同じ舞台で演ぜられるものですし、できた時代も古いので、変わっている点もいくらかあります。それはあとでのべることにしましょう。

さて、狂言の役者が能においてアイの役を演ずるということは前に申しました。それとともに狂言の役者は彼らだけで狂言を演じます。狂言の役は、シテとアドとの二つに分けられます。シテは能の場合と同様に主役ですし、アドはその相手をする役です。ただ狂言の場合は、能とちがってこの二つの役はおたがいに兼ねます。つまり同じ役者がシテも演じますし、またアドも演ずるのです。シテの役は、狂言においても主役であることはもちろんですが、狂言が對話としぐさで劇を展開してゆくものであるために、アドもまたシテとともに重要な役を果たすものであり、したがってシテとアドとが、能のシテ・ワキほどのちがいを持たないのです。それでシテとアドとは、それぞれの役者がちがわなければならないほどの必要がなかったのです。シテ・アドの二人で演ぜられる狂言もありますし、曲によっては、アドが二人以上数人出るものもあります。

3

能・狂言の舞台



正面席



能「夕顔」の演ぜられている舞台